



## 「いのちを守る気象学」

青木 孝 著, 岩波書店,  
2003年2月, 200ページ,  
2200円(本体価格)

気象学会の会員諸氏は、折に触れ、気象災害や防災について聞かれることもあるであろう。そのような時、自身の専門とする分野から少し外れると、具体的な災害の危険や対処法について、存外正確な知識を持ち合わせていないことに気づかれる場合が少なからずあるのではないだろうか？ 誤った助言は思わぬ事態を引き起こしかねないことを考えると、気象学会会員たる者、気象災害に関するひとつの知識を身につけておく必要があるのではないだろうか。

身近な気象災害とその対処方法を一般向けに解説したのが本書である。内容を概観するためにその章立を述べると、「第1章 落雷」、「第2章 突風、竜巻」、「第3章 酷暑」、「第4章 大雪、吹雪」、「第5章 洪水」、「第6章 土石流、崖くずれ」、「第7章 高波、高潮」となっている。各章は4ないし5節で構成され、新聞記事の引用が主体の災害事例の列挙、災害をもたらす気象現象や災害の発生メカニズムの説明、現象の観測手法や予測の可能性に関する説明、災害から身を守るための安全対策の順で記述されている。災害事例の部分では、最近の事例が数例から10例程度引用されている。炎天下の車両の中に寝かされていた幼児が熱中症になった例、吹雪で立ち往生した車両中で排ガス中毒になった事例、都市洪水で冠水した道路を歩いていてマンホールに転落した事例など現代社会に特有な災害事例も盛り込まれていて、災害の特徴や発生状況の多様性を示すのに十分な迫力がある。

「である」調で記述されテンポよく読める導入部分で引き込まれた読者は、一転して「ですます」調で記述された次節以下を読み進むことになる。そこには、それぞれの気象現象や災害が発生する仕組み、現象の観測方法や予報技術の現状が解説されている。一般の読者にもわかるように平易に説明されて、気象学会の会員諸氏にとっては常識的なものであると思うが、それでも自分の得意でない分野に関しては、「なるほど、(誰かに尋ねられたときのために)知っておいてよかった…」と感じられる部分が1~2か所はあるのではないだろうか。各章の最後は、それぞれの災害事例

に対する「安全対策」が記述されている。常識的なことも含まれているが、前節までの解説で災害発生にいたる仕組みを納得した上で読むと、改めてその必要性が納得できるものである。

本書の内容が、一般の人にどの程度理解してもらえるかは、内容が十分に平易に解説されているとはいえ、最近の物理離れ世代を思い浮かべると必ずしも楽観はできないと思われる。しかし、書店で岩波の本を手にする読者層を思い浮かべれば、恐らくメカニズムの説明もかなりの部分理解して貰えるであろう。何よりも本書の特徴は、テンポや読みくちの良さにある。仮に、各章の中間に位置する解説部分を十二分には理解できなくとも、最後の安全対策の部分は「なるほど」と思わせる構成になっているように感じられる。

細かい点ではあるが、1つだけ気になったところがある。突風・竜巻の対処法に、「溝や暗渠、橋の下などに身を隠す」とあるが、「橋の下は風の通り道になる場合がありかえって危険である」と最近の米国で言われている。機会があれば訂正していただければと思う。

もう1つ、インターネットが普及した今日、災害に関する情報を迅速に得る強力な武器がweb検索である。気象庁や気象サービス会社、自治体など、さまざまな機関が気象や災害に関連する情報をwebで公開している。私は、10分おきに更新される大阪市の気象レーダー画像を掲載しているサイトを愛用している。研究室の窓からレーダーの守備範囲をほぼ見渡すことができ、夕立時に帰宅を躊躇する秘書さんに「もう少し待った方がいい…」などと言っている。個人レベルでの情報収集手段として、web検索の重要性を是非一言述べていただきたいところである。しかし、「はじめに」で「洪水などの災害現場からのテレビ中継は、どこか遠い世界、自分とは関係のないできごとのように感じられてしまうこともあるのではないのでしょうか」と述べている著者は、あるいは敢えてこれを含めなかったのかもしれない。自然を肌で感じることの少なくなった現代人にとっては、webで無機的に情報を入力するよりも、肌で感じる感覚をスイッチオンすることの方が、「いのちを守る」ためにはより大事であろうと思われるからである。

評者は大学の講義で1年生以上向けの全学共通科目(教養科目)「自然災害科学I」の気象関連部分を今年度担当しましたが、早速本書を参考図書として利用させていただきました。良書をありがとうございました。

(京都大学防災研究所 石川裕彦)